ひろ小児科ファミリークリニック

PICK UP

THE PERSON

院長
神山 浩

副院長
神山 八弓

「子どもたち一人ひとりの声にしっかり耳を傾け、より良い治療をし、皆が温かい気持ちになれる場所に」

神山浩院長と神山八弓副院長が小児医療の道に進んだ背景には、非常に近しいところがある。
院長は高校時代に自分と同世代にも特有な悩みがあると感じ、「思春期の悩みを解決したい」と、この道へ。
副院長は子どものためになる仕事をと教師などと比較した上で、小児科医を選んだ。
共に「子どもたちのために尽くしたい」という想いが第一義であり、
子どもたちや家族、一人ひとりの声に耳を傾けることを、何より大切にしている。
痛みはどの程度か、何を求めているのか、どのような悩み・不安を抱えているのか——
そうした想いを汲み取り、一人ひとりによりよい医療を提供すると共に、
クリニックに通う人たちが“温かい気持ち”になれる場所にすることが、二人の目標なのだ。

© 2021 USP-Management Co., Ltd.

埼玉県川口市上青木 3-3-1
URL：https://www.hiro-kodomo.jp/

院長 神山 浩

副院長 神山 八弓

医師専門領域の疾患にも対応する子どもと家族のためのクリニック

地域のかかりつけ医として、子どものいる生活に密着した医療を実践している『ひろ小児科ファミリークリニック』。神山浩院長が小児の心臓病などを、奥様の八弓副院長が小児心身症などを専門とするなど、医師専門領域の疾患にも対応していることも強みのクリニックだ。「子どもたちや家族の笑顔のために」との強い想いで日々診療に取り組んでいるお二人のもとを志垣太郎氏が訪問し、インタビューを行った。

――まずは神山浩院長、八弓副院長の歩みから伺います。お二人はどのようにして医療の道を目指されたのでしょうか。

（浩） 実は私も妻も家族に医療従事者がいたわけではなく、「子どもたちのためになる仕事を」と考えたことが医師を目指したきっかけでした。私の場合、校内暴力が社会問題化していたころに高校時代を迎えまして、思春期の人たちの悩みを解決する一助となりたいと考え、そこから医師の道を選択するに至りました。

（八） 私は子どもに関わる仕事をと考えた時、学校の先生、幼稚園の先生と並んで選択肢としてあったのが小児科の先生だったんです。小さいころは病院通いが多く、開業医さんが身近にいたので、自分もお医者さんになりたいと考えたんですよ。

――生い立ちや医療に対する考えが共通しているんですね。先程診療科目を拝見しましたが、専門的な領域も手掛けられて？

（浩） はい。地域のかかりつけ医としての役割を果たすと共に、胸痛、動悸、息苦しさなどの訴えや小児心臓病、小児心身症、発達・児童精神（発達やこころの問題）など、医師専門領域の疾患に対応しています。私の専門が心臓病で、心電図検査、心エコー検査などの設備もありますし、妻が小児心身症が専門であるため、日常でのちょっとした体調や心の悩みから、発達や子育ての相談まで応えているんですよ。

――ほう、体調や心の悩みと言いますと。

（八） たとえば、すいみんの問題であったり、ストレスでお腹が痛くなったりといった、身近なところでもよく聞くようなケースです。大人でもストレスが溜まって胃が痛くなる、心身に不調を来すことがありますよね。ただ、実際にお腹に異常があるのか、精神的な問題なのかは見極めが難しく、ストレスが原因だと思っていたら、本当に身体の病気だったということもあります。そのため、クリニックや病院を利用していただいて、心身の両方を診察することが大事ではないかと思います。

――子どもたちのお医者さんとして間口が広く、安心感があります。

（浩） ありがとうございます。大人であれば「動悸があるから心臓の先生に見てもらおう」などと診療科目を選べますが、子どもの場合はなかなか判断が難しく、その点を解決する方法も確立されていません。ですから、当クリニックが各診療科目への窓口となっていきたいと考えております。また、分からないことがあれば躊躇なく他の医師の方々に助けを求め、アドバイスをいただくよう努めています。私たちが全ての子どもの症状を治せるわけではありませんからね。

――患者さんの治療を第一義に、責任感を持って仕事に取り組んでおられることが窺えます。クリニック名に「ファミリー」とあるのは、特別な想いがあるのでしょうか。

（浩） はい。たとえばお子さんが心の問題を抱えている時、ご両親や兄弟、おじいちゃんやおばあちゃんとどのような関係にあるか、家族単位で診ていくことが大事ではないかと考えたのです。また、そういった医療を実践するには地域に根ざすことが肝要である、というのが私たちが共通して持っている想い。ですから、患者さんやご家族に「とりあえず『ひろ小児科ファミリークリニック』に行ってみよう」と思ってもらえる場所でありたいですね。そして、実際に来てみて温かい気持ちになったり、「ここだったらずっと来ても良いな」と思ってもらえたりするクリニックに、と考えています。

（八） だからこそ、クリニックでの診療にあたっては、患者さんである子どもたちとそのご家族の「声」を何より大切にしたいと思っています。実際に言葉を話すことができない赤ちゃんであっても、まだ上手に話すことのできない幼児であっても、子どもたちが医療者に伝えたいことが絶対に存在するはず。子どもたちやご家族が何を求めているのか、どんなことを不安に思っているか、クリニックの居心地はどうか、そういった様々な想いを知るべく、しっかり耳を傾けていきたい。そうして地域の子どもたちとそのご家族へよりよい医療を提供すべく、これからも努力を重ねていく所存です。

かかりつけ医として、子どものいる生活に密着した医療の実践を

▼地域のかかりつけ医として役割を果たしたい、子どものご家族の受診相談にも対応できるクリニックでありたい――そんな強い想いで日々努めている『ひろ小児科ファミリークリニック』。同クリニックは「子どものいる生活」に密着した医療を実践していくことも診療方針の一つに掲げている。

▼子どものいる毎日は喜びも多い一方で、１日１日が精一杯。特に子どもの体調が優れない時は、子どもも、そして親にとっても苦しい時間となる。そして深刻な症状であることもあるが、病院に行くほどでもない程度で、判断の難しさにモヤモヤやストレスが溜まってしまうことも少なくない。「そうした時に気軽に出向き、悩みを吐き出せる場所になりたい。それは大きな病院ではなく、小さなクリニックの役割だと思います」と神山院長らは語る。

▼時には病気とは関係のないような雑談をする中で、大事なヒントが得られることもある。そうした会話があることで患者さんも抵抗なく医師の指示に従えたりもする。そうした効果も考えてか、同クリニックでは患者さんとの「何気ない会話」も大切にしているそうだ。敷居の高さというものが全くない同クリニックは、まさに人々が「気軽に通える」環境を構築していると言えるだろう。

ゲストインタビュアー
志垣太郎（俳優）

「神山浩院長と八弓副院長は少しお話ししただけで『この人たちなら大丈夫だ』と思える柔和な表情とお人柄を持つ、素敵なお医者様でした。また地域や小児医療に対して本当に真摯に考えておられ、その点でも安心感がありましたね。今後より多くの人々から信頼されるであろう、とても素晴らしいクリニックだと思いましたよ！」

© 2021 USP-Management Co., Ltd.